大学英語教育における現状と課題

――アンケート調査から*――

西　村　由起子

1．はじめに

今日我が国における大学英語教育を巡る状況は，幾多の困難を抱えている。一方で多様な価値観を持ち，多岐にわたる習熟度の学生に対して，画一的な授業では学習成果をあげることは望めない。他方で拡散した価値観の海に呑み込まれ，就学やその後の就業について明確なビジョンを描くことが困難な学生は少なくない。

しかしながらこのような時代背景において，高校までの英語教育で挫折，学習意欲を奪われてきたに等しい学生たちにとって，新たに彼らの再出発，リセットを可能にする教育機関として，大学はかなり重要な役割を担うことができる。特に一部の高度な学術研究を目指す大学とは異なる役割を担う，多数の日本の大学における英語教育にはそのような役割が期待されている。

東洋女子短期大学時代において，本学園では英語英文科，欧米文化学科のどちらにおいても，英語を中心として学ぶことを目標として入学する女子が大多数であった。こうした学生は明確な目的意識を持ち，本学で教育を受けて来たといえる。その後大学教育の流れが，二年制短期大学から四年制大学へと移り，それに伴い本学園も東洋学園大学が発足することになった。それと同時に，学生も多様化することとなった。確かに東洋学園大学発足後も，ある程度英語を中心とする流れが引き継がれたが，その後の学部・学科再編成で，必ずしも英語を目的としない学生が多く在籍することとなったことも事実である。

今日，本学においては「面倒見のよい大学」，「時代の変化に応える大学」，「国際人を育てる大学」，という大学像を目指している。その中で，多様化する学生を前に，本学における英語教育における現状を把握し，問題点の認識，それらの解決策に向けた指針を探ることが本稿の目的である。

2．アンケート調査

大学英語教育改善のために多くの大学で様々な改革が試みられてきた。大学の規模にかかわらず，学術研究機関としての大学か，学部教育に重点を置く大学なのか，といった各大学の目指すそれぞれの使命を具現すべく，英語教育の活性化に向けて多様な試みが行われている。例えば，中野（2005），鳥飼・進藤（1996），松田・他（1993），関口編（1993）等において，その詳細な記録を参照することができる。

現在改革を推進中あるいは更なる改善を目指す大学英語教育関係者にとって，それらの記録から学ぶことは多くかつ示唆に富むものである。またやや旧聞となるが，大学英語教育学会においても，大学「一般英語」教育実態調査研究会（代表研究者　小池生夫）が大規模な調査を行っており，「教員の立場」（1983）及び「学生の立場」（1985）の双方から大学英語教育の実態を報告している。確かに大学英語教育改善にとって両方向からの実態を明らかにする必要がある。

本学において英語担当教員に対しては，2004年英語教育開発センター発足時に，上記の目的のためのアンケート調査を行っている。そこで本稿では，筆者一教員として学生に対するアンケート調査を行い，学生がどのような意識を持って学習に取り組んでいるのかの一端を明らかにすることとした。

具体的には大学英語教育の改善を目的として，2005年４月に本学三学科に在籍する１年次学生を対象に，以下の表１に示されるアンケート調査を実施した。調査項目の作成にあたっては，松田・他（1993）に負うところが多い。結果は学科別に集計されている。本調査は決して包括的な調査ではなく，質問項目が吟味されなければならないし，調査対象者などにおいて制約も偏りもあるものである。将来整備された全学的アンケート調査を行うことがあるとするなら，その予備調査の一部となり得るという性格の調査であることをお断りしておく。回答者は限られており，アンケート内容も十分精査されているとは言えないが，そこからでもある程度の傾向が見られ，その精査が今後の東洋学園における英語教育改善に何らかの示唆を与えることを願っている。

表１　アンケート調査概要

実施日	学科	在籍者数	欠席者	回答者	学科別習熟度	実施授業科目
4/11	国際コミュニケーション学科（以下，IC と略す）	46	6	40	中位（やや下）	LLI
4/21	人間科学科（以下 HS と略す）	48	1	47	中位（やや下）	LLI
4/19	現代経営学科（以下 BA と略す）	23	2	21	最上位	基礎英語

アンケートでは，以下の事柄について，質問している。

1、英語が好きかどうか（英語志向についての判定）
2、英語についての自信
3、高校までの英語授業
4、授業に望む心構え・態度等
5、望む授業スタイル
6、資格試験対策
7、教材で扱う題材の分野
8、上達を望んでいること
9、短期留学・留学

このアンケート調査は，実施対象クラスが，表1に示されている授業科目の一回目ないし二回目の授業時間内に行われ，要した時間はおよそ20分程度であった。学科別習熟度とは，入学式当日各学部のクラス編成のために学部別に行われるプレースメントテストの結果に基づくものである。国際コミュニケーション学科と人間科学科を有する人文学部においては同一テストを行い，各学科に所属する各学生の得点により，学科別クラス編成を決定している。現代経営学部でもほぼ同様の方式が取られているが，人文学部と現代経営学部において同一テストは用いられていないので，調査クラスの習熟度は各学科内の相対的レベルである。

実際のアンケート項目は，本稿末付録1に添付している。回答はできるだけ制約をしない形にしたため，実際にはかなり複雑な回答のパターンが生じている。そこで，本稿末付録2にあるような形で，回答を集計している。他の集計の仕方もあり得るが，質問の性質上回答は比較的簡単に解釈可能であり，集計の方法による差はあまり無いと考えられる。

3．結果及び分析

最初に，以下の結果から学科間を単純に比較することはできないことを明確にしておきたい。アンケートを実施したクラスの英語習熟度が，明らかに学科間で異なるからである。その上で以下の結果は，あくまでもこうした調査でどのような事がわかるのかを示唆するものにすぎないことをあらかじめ断っておく。

3.1. 英語の好き嫌いについて

Q1において，「英語が好きである」というステイトメントをどのように思うかについて質

問しており，「非常にそう思う」場合は（a），「ややそう思う」場合は（b），「あまりそう思わない」場合は（c），「全くそう思わない」場合は（d）と記入するよう回答を求めた。以下の表2に学科別結果を示す。

表2 「英語が好きである」について

内容	IC（N= 40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
(a)「非常にそう思う」	12（30%）	0（0%）	5（24%）	17（16%）
(b)「ややそう思う」	22（55%）	11（23%）	12（57%）	45（42%）
(c)「あまりそう思わない」	6（15%）	28（60%）	2（10%）	36（33%）
(d)「全くそう思わない」	0（0%）	8（17%）	2（10%）	10（9%）
*（無回答）	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）

ICとHSとでは，英語の好き嫌いに関して，約8対2の割合でちょうど逆の傾向となったのが特徴的である。ICでは「ややそう思う」も含め，8割以上の学生が「好き」と答えたのに対して，HSでは「好きだととても思う」が皆無である。さらに英語志向かどうかという観点からみると，英語志向と解釈できる回答をした学生も，HSではどちらかといえば「やや好き」，という程度で2割程度しかいない。このようにHSにおいては8割近い学生が英語志向であるとは言えない結果が出ている。

これに対し，BAには英語志向の学生が8割程度いると見ることができる。サンプルの数が少ないとはいえ，このクラスのパターンとしては英語を全く好まない学生もいるが，英語志向8割というICのパターンに近い。BAにおいては調査実施クラスは学部ごとの英語習熟度レベルで最上級のクラスであることから，専門分野は英語系ではなくても，英語に対する見方は英語系専攻を含むICの受け止め方と似通ったものとなっているという可能性が高い。

3.2. 英語に関する自信と高校の英語授業の評価

次に，Q2においては，英語に関する自信の程度について質問し，Q3においては高校までの英語授業が面白かったか，について訊いている。各質問の結果は，下の表3，表4においてそれぞれ示されている。

表3　英語に関する自信

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q2-1	自信がある	2（5%）	0（0%）	3（14%）	5（5%）
Q2-2	あまり自信がない。苦手分野あり	33（83%）	24（51%）	12（57%）	69（65%）
Q2-3	全く自信がない	5（13%）	23（49%）	5（24%）	33（31%）
Q2	無回答	0（0%）	0（0%）	1（5%）	1（1%）

表4　高校までの英語の授業

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q3-1	面白かった	25（63%）	17（36%）	15（71%）	57（54%）
Q3-2	おもしろくなかったが受験にプラス	13（33%）	21（45%）	4（19%）	38（36%）
Q3-3	どちらでもない	2（5%）	9（19%）	1（5%）	12（11%）
Q3	無回答	0（0%）	0（0%）	1（5%）	1（1%）

結果を見ると，Q2については，英語に自信のある学生は全体でも５名（５％弱）のみで，95％の学生は自信を持っていない。これとは対照的に，Q3については，高校までの英語授業は，HS を除き過半数が面白かったと回答している。

前述した大学英語教育学会の大規模な実態調査では，高校までの英語の授業について詳細にわたり設問されており，学生の学習傾向や好き嫌いの推移が明らかになるようになっているが，本稿ではあくまでパイロットとしての調査で，この点は簡略化している。

英語専門を含む IC と，英語習熟度が比較的高い学生を含む BA では，高校での英語教育を約三分の二が面白かったとしているのに対して，英語志向ではない学生が多い HS では，面白かったと評価した学生は三分の一程度に留まっている。「英語が嫌いである」ことと，「英語が面白くない」こととは悪循環で，英語授業が面白くなければ英語が嫌いにもなるし，嫌いであれば面白いと学生に感じさせることができる授業を行うのは，教師にとって至難の業であろう。

高校までの英語が面白かったと思ってはいるにせよ，自信を持っていない者が大多数を占めていることから，自分の英語が何かに使えるほどのレベルではないと半ばあきらめに近い感覚を持っていることすら伺える。

3.3. 学習態度

Q4においては，授業に望む心構え，取り組み方などの学習態度や，英語学習の目的について様々な事柄を訊いている。学科別に回答者数・割合を列挙すると，表5のようになる。

表5 英語学習についての態度，および英語学習の目的

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q4-1	英語の能力を高めたい。	38（95%）	40（85%）	18（86%）	96（89%）
Q4-2	よい成績が取りたい。	33（83%）	39（83%）	18（86%）	90（83%）
Q4-3	単位が取れさえすればよい。	20（50%）	31（66%）	8（38%）	59（55%）
Q4-4	出来るなら英語は勉強したくない。	4（10%）	27（57%）	3（14%）	34（31%）
Q4-5	宿題は多くても構わない。	1（3%）	3（6%）	7（33%）	11（10%）
Q4-6	宿題はない方がよい。	30（75%）	40（85%）	15（71%）	85（79%）
Q4-7	やっと大学にはいったから思いきり遊びたい。	30（75%）	35（74%）	10（48%）	75（69%）
Q4-8	もし出席を取らないなら多分授業には出ないだろう。	10（25%）	14（30%）	2（10%）	26（24%）
Q4-9	授業は英語でやって欲しい。	13（33%）	8（17%）	7（33%）	28（26%）
Q4-10	授業全部が英語だと大変困る。	28（70%）	43（91%）	15（71%）	86（80%）
Q4-11	きちんと勉強したい	35（88%）	32（68%）	18（86%）	85（79%）
Q4-12	留学したい	28（70%）	13（28%）	5（24%）	46（43%）
Q4-13	英語検定を受けたい	27（68%）	16（34%）	14（67%）	57（53%）
Q4-14	公務員試験に合格したい	10（25%）	14（30%）	8（38%）	32（30%）
Q4-15	教員試験に合格したい	8（20%）	7（15%）	3（14%）	18（17%）
Q4-16	入社試験に合格したい	28（70%）	30（64%）	14（67%）	72（67%）
Q4-17	国際的な仕事がしたい	30（75%）	7（15%）	9（43%）	46（43%）
Q4-18	映画などの台詞を理解したい	33（83%）	33（70%）	11（52%）	77（71%）

上の数字から様々な事柄が読み取れる。三学科に共通している傾向をまず述べよう。

Q4-1への回答は，英語能力を向上させたい，と考える回答者はほぼ全員である事を示している。各自の能力水準や英語の好き嫌いにかかわらず，当然のことながら，英語に上達したいと考えていることなる。そして，学校の授業科目として英語を扱う以上，結果として出てくる評価においては，Q4-2への回答が示しているように良い成績を期待することもまた当然といえる。

共通したパターンがみられるのは，英語に対して積極的態度を示す内容だけではない。Q4-5，Q4-6，Q4-10，Q4-14～Q4-16への回答において，ほぼ同程度の割合の学生が同様のパターンで回答している。その中でいくつか特徴的な点があることに注意したい。

まずQ4-5, Q4-6を見ると，英語学力は高めたいと思いながらも，宿題に対する抵抗が三学科同程度の水準でかなり強い。特にQ4-6においては高い割合で授業外学習に消極的な姿勢が伺える。これはQ4-10で，英語だけで行われる授業について行けないのでは困る，という回答が三学科において同様に多く，特にHSで高い割合であり，英語能力を高めたいという気持ちはここにも表れているにもかかわらず，そうなのである。この点の今後の精査が必要であろう。

ただし，Q4-5においてBAの回答が，他の二学科よりもかなり飛び抜けて宿題を肯定している割合が高いことも注目される。学部内で高い習熟度の学生の中には，それなりに宿題の効用も理解し，積極的にとらえている学生が三分の一は存在することは評価されるべきであろう。BAと他の学科との違いを考えると，英語習熟度水準が異なる点が学習意欲と正に相関していると考えることもできる。

三学科の共通傾向は，Q4-14～Q4-16においても見られる。それらの質問では，英語学習がどのような目的と関連させて考えているか，について回答を求めている。教職課程の設置されていないBAで教員試験を挙げる割合が低いのは当然としても，IC・HSでも教員試験合格を英語学習とリンクさせている学生は意外と少ない。これに対して，三学科共通して，「公務員」「教員」は，卒業後の就業先として特に意識されていないものの，会社に就職することは考えているようで，入社試験に合格したい，というQ4-16の項目に対しては，三分の二以上がその目的のために英語が必要，という意識で回答していると判断できる。

次に各学科固有のパターンを見てみよう。第一に，ICについては，Q4-12，Q4-17，Q4-18において他の二学科との違いが顕著である。Q4-12の留学，Q4-17の国際的な仕事に対しては，他学科と比べて遙かに高い割合で回答しており，学科の特徴が現れている数値と言えよう。趣味の分野に属するQ4-18，英語での映画理解においては，HS・BAでも比較的高い割合で肯定的回答はあるが，ICほどではない。

第二に，HSについてその特徴を見てみよう。IC，BAとは非常に異なるパターンは，Q4-4「出来るなら英語は勉強したくない。」においてみられる。ICとBAにおいては少数であるのに，HS約三分の二の学生がそう答えている。同様の傾向は，Q4-3においても見られ，英語が単位取得のみに必要と考える学生がかなりの数に上る。他の二学科とやや異なる傾向は更にQ4-8，Q4-9，Q4-10においても見られる。まずQ4-8では，出席することが単位取得の必

要条件となっている現状のもとで，その条件が無くなったら出席しないという回答が多い。このことは，何かを学ぶために授業に出席するという意識を持っていない学生が他学科より多く存在している事を示している。Q4-9, Q4-10においては，同じ内容をほぼ逆の形で質問しているが，その結果から英語で行われる授業に対する抵抗が他学科よりも一段と強い事がわかる。Q4-13の英語検定に関する項目でも同様に，他学科では肯定的回答が多いのに対して，その半数程度しか肯定的回答を示していない。

最後にBAの特徴的傾向を探る。サンプル数が少ないことから何とも言えないが，他の二学科と異なっている点は宿題に対する抵抗の強さに関してすでに指摘したが，Q4-5においても更にその傾向がみられる。この質問では宿題が多いことをどう考えるか訊いているが，多くても構わないと考える学生が，他学科より遙かに多い割合となっている。またQ4-7は，大学＝遊ぶところと考える学生がどの程度いるかを訊く質問であるが，高校生活から解放された大学入学後間もない時期という調査のタイミングで，この項目に否定的に回答する学生が半数以上という割合である。これは，この項目に逆に肯定的に回答する学生が，IC，HSでは四分の三という高い割合であったのと対照的である。またQ4-14では，すでに「公務員」は全体としてはそれほど強く意識されていないと指摘したが，BAに限れば，相対的に他学科よりも高水準で対象としてとらえられていると言える。

3.4. 望む授業形態について

Q5ではどのような授業形態を望むか訊いており，結果は，表6に示されている。

表6 望む授業形態

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q5-1	講義中心の教師主導型授業	22（55%）	30（64%）	8（38%）	60（56%）
Q5-2	教師が授業を進めながら学生に質問する授業	19（48%）	12（26%）	14（67%）	45（42%）
Q5-3	調べて発表する学生主導型授業	7（18%）	9（19%）	4（19%）	20（19%）
Q5-4	グループ活動主体の授業	7（18%）	9（19%）	4（19%）	20（19%）
Q5-5	自分のペースで読む個別学習	19（48%）	24（51%）	5（24%）	48（44%）
Q5-6	LL教室を使った授業	29（73%）	29（62%）	12（57%）	70（65%）
Q5-7	コンピュータ教室での授業	20（50%）	26（55%）	18（86%）	64（59%）

三学科共通して見られる傾向は，主体的に自分から参加するタイプの授業（Q5-3, Q5-4）に対しては低い肯定率となっている点である。その傾向は特にHSに著しいことが特徴的である。

他の形態のうち，Q5-1への回答に見られるように，講義中心の授業を望む学生がHSにおいて約三分の二の割合で存在していることは，ICで半数，BAで約三分の一と強いコントラストを示している。他にもHSについて特徴的な傾向はQ5-2に見られるが，教師が学生に質問するタイプを望まない点で，他学科と際だって異なっている。

BAで特徴的な傾向は，Q5-7への回答に見られるようにコンピュータ教室を希望している点であるが，この調査が実施された教室がコンピュータ教室であった事と関係しているかもしれない。ICだけに特徴的という傾向はそれほど見られないが，Q5-6への回答結果に表われているLL教室に対する好感があげられ，これもこのアンケート調査が実施されたLL教室との関係があるかもしれない。HSにおけるLL教室に対する好感はICに次ぐもので，ICと同じくアンケート調査実施教室と関連づけられる可能性がある。

3.5. 資格試験などについて

Q6では英検,TOEFL,TOEICなどの資格試験対策や練習を授業に取り入れる事について訊いており，結果は表7において示す。

表7　資格試験対策

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q6-1	興味がないので取り入れなくてよい	8（20%）	26（55%）	4（19%）	38（35%）
Q6-2	英検対策	25（63%）	19（40%）	11（52%）	55（51%）
Q6-3	TOEFL対策	30（75%）	19（40%）	12（57%）	61（56%）
Q6-4	TOEIC対策	33（83%）	19（40%）	13（62%）	65（60%）

表7の示唆するところは，まずHSにおいて，他学科とは異なりQ6-1に対する肯定的な回答が過半数を占めている事から，資格試験がこの学科の学生の動機付けにはあまりなっていないという点である。英語専門を含むICについては，全般的にどの資格試験にも積極的な態度であり，BAは同じ傾向だが，希望する学生の割合は各試験について5～6割の同水準で，ICよりも下回っている。

3.6. リーディングで扱う題材の分野について

Q7では，主にリーディング等で扱う題材がどのような分野であることを望むかについて質問している。各選択肢は，松田・他（1993，p.14）により設定されたものを使用している。学科別で希望する分野の集計を以下の表8において示す。

表8　リーディングで扱う題材の分野

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q7-1	伝記	13　(33%)	14（30%）	10（48%）	37（34%）
Q7-2	物語	29（73%）	34（72%）	14（67%）	77（71%）
Q7-3	外国事情・歴史	18（45%）	14（30%）	14（67%）	46（43%）
Q7-4	評論	9（23%）	5（11%）	6（29%）	20（19%）
Q7-5	新聞・ニュース	23（58%）	26（55%）	12（57%）	61（56%）
Q7-6	経済・経営・商学	11（28%）	5（11%）	11（52%）	27（25%）
Q7-7	日常社会生活記事	29（73%）	23（49%）	12（57%）	64（59%）
Q7-8	映画シナリオ	36（90%）	42（89%）	17（81%）	95（88%）
Q7-9	異文化交流・摩擦	22（55%）	13（28%）	10（48%）	45（42%）
Q7-10	実務英語	23（58%）	15（32%）	12（57%）	50（46%）

三学科トータルで希望の多い順に分野を列挙すると，以下のようになる。

映画シナリオ（88%），
物語（71%），
日常社会生活記事（59%），
新聞・ニュース（56%），
実務英語（46%），
外国事情・歴史（43%），
異文化交流・摩擦（42%），
伝記（34%），
経済・経営・商学（25%），
評論（19%）

ここからわかることは，映画シナリオ（88%），物語（71%）に関心が集中していることである。それ以外のジャンルで過半数の学生から支持のあるジャンルは，新聞・ニュースまでであり，実務英語から下は支持もさほど多くはなく，逆に関心の集まらない分野が多いということが目につく。

学科別に見てみると，英語専門を含むICにおいては上位5件までは全体の傾向と同様である。国際性を伸ばす学科であるはずなのに，外国事情・歴史が過半数から支持を得られて

いないのは，歴史と組み合わせられているからだろうか。HS において特徴的な傾向は，分野の序列においては他学科とそれ程大きな違いがないが，関心の度合いが他学科に比べて低いという点が上げられる。これは10分野のうち６分野までが三分の一以下の支持しか得ておらず，IC での３分野，BA での１分野とは大きくは異なっている。BA は逆に各分野にかなりの関心を集めており，特に学科で専門に学ぶ経済・経営・商学関連では，他学科が低い関心であったのとは対照的で，過半数から支持を得ている。

この質問項目の設定が適切であったか，という疑問が残る。いわゆる英語教科書で取り扱われている分野がいくつか挙げられており，これらの分野の選択基準が明確ではないことがある。この質問では自由記述欄で，それ以外の分野の記入を求めておらず，その点不備があり，また「各学科の専門に関連した分野」という項目があれば，どの学科にも公平な取り扱いとなったといえるかもしれない。

3.7. 上達を望んでいること

この項目では本学英語授業でどの様なスキルの上達を望んでいるかを訊いており，提示された項目以外にあれば，自由記述欄で記入を求めている。結果は表９に示されている。

表９　上達を望んでいること

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q8-1	英会話	39（98%）	44（94%）	19（90%）	102（94%）
Q8-2	リスニング	38（95%）	44（94%）	18（86%）	100（93%）
Q8-3	英字新聞がよく読める	31（78%）	30（64%）	17（81%）	78（72%）
Q8-4	英文がきちんと和訳できる	34（85%）	41（87%）	16（76%）	91（84%）
Q8-5	英文レターがきちんと書ける	32（80%）	34（72%）	15（71%）	81（75%）
Q8-6	和文が正しく英訳できる	34（85%）	42（89%）	18（86%）	94（87%）
Q8-7	英文法が確実にわかる	30（75%）	34（72%）	18（86%）	82（76%）
Q8-8	英文長文読解	24（60%）	26（55%）	15（71%）	65（60%）
Q8-9	英語の歌の歌詞がわかり，歌える	37（93%）	42（89%）	15（71%）	94（87%）
Q8-10	洋画が字幕無しでわかる	35（88%）	40（85%）	14（67%）	89（82%）
Q8-11	英語が上手に発音できる	37（93%）	32（68%）	17（81%）	86（80%）
Q8-12	英語でディスカッション	22（55%）	11（23%）	7（33%）	40（37%）
Q8-13	英語でディベート	18（45%）	8（17%）	6（29%）	32（30%）
Q8-14	英語でスピーチ	12（30%）	6（13%）	7（33%）	25（23%）

表9から明らかなことは，ほぼすべての学生が英会話やリスニング能力を向上させたいと考えていることで，この傾向は20年前に大学英語教育学会が学生対象に行った調査結果と変わっていない。和文英訳も三学科共通して高い数値が出ている。逆に全学科にわたって関心の低いスキル・アクティビティは，スピーチやディベートとなっている。

学科別に見ると，ICでは各種スキルを伸ばしたいと考える学生が多いと見られ，三学科のうち最も高い数値を示している項目数が最多で，8項目に及んでいる。HSではディスカッションに関心が持たれておらず，長文読解，英字新聞，英語の発音も他学科の数値より低い。BAでは，英字新聞，英文法に他学科より高い関心が寄せられている。

3.8. 短期留学・留学などについて

最後に短期留学や留学について質問している。短期留学と留学に関して，どの様に期間を考えるかは回答者に任せ，例えば短期留学は3ヶ月以内，留学はそれ以上の期間を指す，という指定は行わなかった。結果は表10において示されている。

表10　短期留学・留学

	内容	IC（N=40）	HS（N=47）	BA（N=21）	Total（N=108）
Q9-1	語学研修などの短期留学	34（85%）	17（36%）	13（62%）	64（59%）
Q9-2	留学したい	33（83%）	13（28%）	11（52%）	57（53%）
Q9-3	在学中に短期留学をしたい	38（95%）	31（66%）	16（76%）	85（79%）
Q9-4	在学中に留学してみたい	35（88%）	25（53%）	15（71%）	75（69%）
Q9-5	在学中に両方	26（65%）	24（51%）	16（76%）	66（61%）
Q9-6	卒業後に短期留学	16（40%）	25（53%）	11（52%）	52（48%）
Q9-7	卒業後に留学	13（33%）	23（49%）	12（57%）	48（44%）
Q9-8	卒業後に両方	24（60%）	24（51%）	15（71%）	63（58%）

これらの結果から読み取れる傾向は，ICではほぼすべての項目で非常に意欲的で他学科をはるかに上回っているが，Q9-5在学中に両方と，Q9-6，Q9-7卒業後に関しては，他学科より割合が低い点である。HSでは，ICとは逆のパターンとなっている。Q9-3在学中の短期留学では，やや他学科に近い数値ではあるが，特に，Q9-2留学したい，においては，ICと正反対の傾向を示している。卒業後に関してICと異なる数値となっているのは，HSでは専門性が強く，大学院進学を視野に入れる学生がICより多いことが考えられ，海外も考えないことはない，という傾向の表れであろうか。BAではすべての項目に半数以上の関心が寄せられており，ICのパターンに近い。ICとの違いは卒業後についてで，Q9-6，Q9-7，Q9-8では

三学科中最も高い数値となっている。卒業後に関してBAにおいてもHSと同様の傾向を示したことは興味深い。

3.9.「本学英語教育に対する希望」自由記述欄より

本アンケート調査の最後には,「本学英語教育に対する希望」を自由記述として求めている。この項目に記入された学生の希望を原文のまま，本稿末付録3に示す。重複している内容も多いが，学生の声に謙虚に耳をかたむけたい。

4．考察

以上多岐にわたる質問項目により学科別に傾向の違いなどが明らかとなった。すでに前節の最初に述べたように，これがすぐさま学科間の差異を表していると断言できないが，示唆的であることは事実である。そこでそれらについて多少踏み込んだ解釈をしてみよう。

まずICは,「国際コミュニケーション学科」という名称にふさわしい，英語志向・国際志向を持った学生が多く存在する，と考えて良いように思われる。調査対象のクラスでは英語志向の学生が85%にのぼり，留学などについても在学中なら積極的にとらえている。

それに対して，HSでは，調査対象のクラスにおいて逆に八割に近い学生が英語志向ではなく，しかもその中に,「やや」ではなく「非常に」英語に対して否定的な層が存在している。このような傾向が本当にHS全体に存在するのか，は今後精査しなければならない重大な点と考えられる。しかしながら，調査対象のHSクラスでも英語の重要性，必要性については十分認識していることも事実である。従って，こうした「重要性・必要性の認識」が必ずしも積極的授業態度・取り組み方には表れてきていないという点が問題とも考えられる。その背後には，推測にしか過ぎないが，彼らは自分がこれまでの学習面で励まされたり，ほめられたりした経験をしてこなかったという状況があるのかもしれない。そうだとすると，積極的態度が見られないことの対策として，これまでの英語学習で困難な経験をしてきていると推察される点にヒントを見いだすことができるかもしれない。つまり彼らの中には，大学で英語をやり直せるものであるなら再トライしてみたい，と考えている傾向があるという解釈も可能であるからである。実際に，本稿末付録3に示した「英語教育に対する希望」についての自由記述においては，その傾向が如実に現れている。

HSに見られて，ICでは観察されなかった英語についての積極的な傾向として，留学を卒業後に考える学生の割合である。ICでは，短期・長期を問わず留学は在学中を意識しているが，HSでは卒業後に考えている学生がICよりも高い割合であったことは意外であった。留学がどの様な内容を指すのか（語学留学，専門の勉強をする留学，大学院での留学，等）は

明らかではないが，心理学などを中心とした専門分野では，卒業後も大学院進学が必要と考える学生も存在する。ICでは卒業後大学院進学がどの程度意識されているか，は推測の域を出ないが，専門性の違いからHSよりも低いこともあり得る。本学卒業後に海外の大学院に進学する学生が将来出現することを望みたいが，今まだすぐには留学できなくても，留学できるぐらい英語を勉強して将来は留学をしたいと漠然とした憧れであったとしても考えている学生がHSにいることは，HSの英語志向ではない学生が多い，という現実のなかで，HSにおける英語教育を考える際の重要なポイントの一つになると考えられる。

学科別で，BAについて見てみると，この学部からの調査クラスが習熟度で相対的に最も上のクラスであること，および英語を専門としない分野の学科に在籍する学生であることを考慮しなければならない。前者からは，この調査でのBAの回答がBAの典型であるとは考えにくく，ICやHSにおいて習熟度でほぼ中位であった学生による回答がICやHSの平均的姿と考えることが可能であるのに対して，それとは一線を画するものであることには注意する必要がある。

そうした留意点を念頭に置きながら本調査におけるBAの回答を見ると，ICと同様，英語志向・国際志向を示していることがわかる。しかも授業態度や，教材で扱う題材の分野，上達を望んでいること，などの項目において，他学科よりも積極的な好ましい傾向が見られる。BA全体としてそのような傾向が出現するかは不明だが，調査クラスに関しては専門を意識した英語に積極的な層であると解釈され，BAにそのような学生が存在していることがわかる。英語を専門分野としない，という点ではHSと同様であるが，HSとの違いが本調査に限り習熟度なので，逆に異なる習熟度の学生であれば，BAにおいてもHSに見られるような英語志向ではない学生が多い，といった傾向を示すことも考えられる。ただし，専門性がHSと同様，比較的はっきりとしていることもあるので，英語志向ではない学生の多い中で，志を持った学生は，卒業後のビジョンも比較的明確に描き，そのために必要な英語，という意識で英語に取り組む事も希望的には考えられる。これはあくまでも推測の域を越えないので，BAにおいて英語学習に関してどの様な傾向があるかは，今後の調査に待たなければならない。

本調査の結果をふまえるなら，どの学部でも学生の語学水準には大いに改善の余地があることになる。英語についての自信を質問したが，自分の英語が使い物にならない水準である事をほとんどの学生が認識しており，「自信がある」と答えた少数の学生にとっても，自己認識と現実の語学力とには乖離があることが多い。彼らの学力レベルには立ち入らないが，日頃教室で学生と接している中で，基本レベルの学習内容を定着させていない学生がかなりの数にのぼっていることは，多くの英語担当者が認識していることであろう。

山田・他（1988），若林・根岸（1993）のような研究で明らかにされているように，英語学力差がどの様にして生じるのかという根本的な地点に立ち返りながら，彼らの習熟度を引き上げる方策を考えなければならない。実際付録３に収録した学生の自由記述欄にもあるように，英語能力を確実に向上させることを学生自身が強く望んでいる。プレースメントテストにおいて，いかに得点の開きが上位下位クラスとの間で大きかったとしても，各クラス，各学生の初期値からの向上をはかり，そのようなに努力の中で，学生の満足度も高めるという原点に立ち返った地道な努力が，今まで以上に必要とされている。

学生の満足度で重要な位置を占めているのが，日々の授業での学習者に対する授業の工夫である。この点は斎藤（2003），瀧口（2003），松畑（1989）等々，幾多の研究で報告されている通りである。これらの研究は主として入門期等における指導方に焦点があるものの，その知見は大学レベルでの英語教育に応用可能で，本学での英語教育改善に繋がる部分も多い。こうした研究の蓄積を活用できるよう模索してゆきたい。

また，英語が好きか嫌いにかかわらず，些細な事を契機に英語の学習意欲が減退することが起こり得る。荒井（2004）においても報告されている通り，学習意欲減退を引き起こす原因には様々な要因が考えられるが，本学の英語教育において，教員側や大学側に帰する原因を極力排除するよう，努めなければならない。特に，高校までの英語学習で躓いてきたとすると，その必要性はなおさら高まると考えられる。本稿では特に具体的な努力の方法には言及していないが，そのような地道な個々の努力の積み重ねが，遠回りでも，本学の目指す大学像に近づく方法なのではなかろうか。

５．終わりに

以上かなり細かい質問に対して，学生の回答を見てきたが，本調査に不備や限界があることをふまえた上で，明らかになった傾向として，以下の点を挙げる。

１）回答者の傾向は，学科の違い，英語が好きかどうかによる違い，及び英語習熟度による違いから生じていると考えられる。

２）そのような違いがあるのにもかかわらず，英語能力を伸ばしたいと考えない学生は皆無に等しい。

３）英語志向ではない学生が存在するが，好まないことと学習意欲の有無とを区別する必要がある。「嫌い」＝「やる気がない」ではないし，英語の必要性は認識されている。

４）自信がなく，苦手意識を持っている学生にとっては，大学でもう一度やり直せるものなら再度習い直し身につけたい，という意識を強く持っている。

なかでも特に強調しておきたい結果は，英語志向か否かにかかわらず，また習熟度や学科の専門分野にもかかわらず，ほぼすべての学生が英語能力を高めたい，と回答していることである。この点は，教育に携わる者は決して軽視してはならず，好まないからやる気がないと決め付けたり，英語志向ではなく英語を使う必要に遭遇しそうもない者に英語をやらせても無駄，といった態度は取るべきではない。好まない学生にも，どうしたら英語に向かわせることができるか，どのようにして成就感，達成感をもたせ，彼らに学ぶ楽しさや，英語が使えるようになる喜びを体感させる事ができるのかが非常に重要となる。魅力的な授業を行えるようにするためには教員は努力が必要だが，面白い授業の実現には，教員個人レベルだけで対処するのではなく，チームを組んで，各自の工夫やノウハウを教員相互で共有することも大切である。その意味ではすべき事をやり尽くして，これ以上改善のすべがない，という状況ではなく，本学の英語教育は改善される余地が大幅に残されている。

本稿で明らかになったことは，調査を待つまでもなく，経験などから認識されていることと，思われる向きもあるかもしれない。英語教育に携わる教員もそうでない者も，本学での教育にかかわる教職員は，英語志向であれそうでない学生に対しても，本学で学んで良かったという意識を彼らが持てるよう，日々努力が必要であると考えている。これら努力の蓄積が，本学のミッションを具現化する方法であると確信している。

＊本調査に関しては，筆者の依頼に協力を惜しまなかった授業担当者・関係者には心より感謝申し上げたい。またその調査処理に関して，メディアセンターヘルプデスクより有益な助言をいただいた事を記し，感謝の意を表わしたい。

参考文献

荒井貴和（2004）．「何が外国語学習者のやる気を失わせるか？—動機減退の原因とそれに対する学習者の反応に関する質的調査—」『東洋学園大学紀要』12, 39-47.

斎藤栄二（2003）．『基礎学力をつける英語の授業』三省堂．

関口一郎編（1993）．『慶応湘南藤沢キャンパス外国語教育への挑戦：新しい外国語教育をめざして』三修社．

大学「一般英語」教育実態調査研究会（代表研究者　小池生夫）（1983）．『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（Ⅰ）—教員の立場—』．昭和56年度文部省科学研究費助成金（総合研究B）研究課題番号56305025，昭和57年度文部省科学研究費助成金（総合研究A）研究課題番号57312001.

大学「一般英語」教育実態調査研究会（代表研究者　小池生夫）（1985）『大学英語教育に関する実態と将来像の統合的研究（Ⅱ）—学生の立場—』．昭和58年度文部省科学研究費助成金（総合研究A）研究課題番号57312001，昭和59年度文部省科学研究費助成金（総合研究A）研究課題番号57312001.

瀧口優（2003）．『「苦手」を「好き」に変える英語授業：アイディア集』大修館.

鳥飼玖美子，進藤久美子（1996）．『大学英語教育の改革：東洋英和女学院大学の試み』三修社.

中野美知子（2005）．『英語は早稲田で学べ　ネットワーク型教育が「大学英語」を変えたThe Waseda method for global communication』東洋経済新報社.

松田まゆみ他（1993).『発信型英語教育の実践：桜美林大学経済学部の挑戦』三修社.
松畑熙一（1989).『自ら学ぶ力を育てる英語授業：自己教育力の養成をめざして』研究社出版.
山田純，松浦伸和，柳瀬陽介（1988).『英語学力差はどこから生じるのか：入門期のドキュメント』大修館.
若林俊輔・根岸雅史（1993).『無責任なテストが落ちこぼれを作る：正しい問題作成への英語授業学的アプローチ』大修館.

付録　1

英語教育事前アンケート

年　　組　　番　氏名

以下のアンケートは，本学の英語教育を改善するためのものです。質問に対してどの様に思うか，正直に答えて下さい。それぞれの答えについて，下のａからｄまでのアルファベットのうちいずれか一つを（　）内に記入して下さい。あるいは指示に従って，あなたの考えを書いて下さい。

（ａ）非常にそう思う，　（ｂ）ややそう思う，　（ｃ）あまりそうは思わない，
（ｄ）全くそうは思わない

１．あなたは英語についてどう思いますか

（　　）英語は，好きです。

質問１に（ｃ）あるいは（ｄ）と回答した方は，理由も書いて下さい。

（　　）

２．自分の英語能力をどう思いますか。

①（　　）自信がある。

②（　　）あまり自信がない。特に苦手な分野がある

③（　　）全く駄目

質問２－②に（ａ）あるいは（ｂ）と回答した方は，どんな分野が苦手かも書いて下さい。
（　　）

３．高校までの英語の授業をどう思いますか。

①（　　）面白かった。

②（　　）面白くはなかったが受験には役にたった

③　その他（　　）

質問３―①に（ｃ）あるいは（ｄ）と回答した方は，どの様な点でそう思ったのかも書いて下さい。

（　　）

３―③には，そのほかに思ったことがあれば，書いて下さい。

４．あなたはどのような心構えで英語の授業に臨んでいますか。（ａ～ｅを記入）

①（　　）英語の能力を高めたい。

②（　　）よい成績が取りたい。

③（　　）単位が取れさえすればよい。

④（　　）出来るなら英語は勉強したくない。

⑤（　　）宿題は多くても構わない。

⑥（　　）宿題はない方がよい。

⑦（　　）やっと大学にはいったから思いきり遊びたい。

⑧（　　）もし出席を取らないなら，おそらく授業には出ないだろう。

⑨（　　）授業は英語でやって欲しい。

⑩（　　）授業全部が英語だと大変困る。

質問4—①に（a）あるいは（b）と回答した方は，更に，英語学習の目的についても回答して下さい。

⑪（　　）きちんと勉強したい

⑫（　　）留学したい

⑬（　　）英語検定を受けたい

⑭（　　）公務員試験に合格したい

⑮（　　）教員試験に合格したい

⑯（　　）入社試験に合格したい

⑰（　　）卒業後英語を使って国際的な仕事がしたい

⑱（　　）映画などの台詞を理解したい

5．どのような授業スタイルを望んでいますか。

①（　　）講義中心の教師主導型授業を望む。

②（　　）教師が授業を進めながら時々学生に質問する授業を望む。

③（　　）学生が教材を決め，自分で調べて発表する学生主導型の授業を望む。

④（　　）小グループで課題等をやっていくグループ活動主体の授業を望む。

⑤（　　）自分の選んだものを自分のペースで読む個別学習を望む。

⑥（　　）LL 教室を使った授業を望む。

⑦（　　）コンピュータ教室での授業を望む。

6．英検，TOEFL，TOEIC などの準備・練習を授業に取り入れてほしいですか。

①（　　）特に興味がない。

②（　　）英検準備を取り入れてほしい

③（　　）TOEFL 準備を取り入れてほしい

④（　　）TOEIC 準備を取り入れてほしい

7．リーディングの題材としては，次のどの分野に興味がありますか。

①（　　）伝記に興味がある

②（　　）物語

③（　　）外国事情・歴史

④（　　）評論

⑤（　　）新聞・ニュース

⑥（　　）経済・経営・商学関係の記事

⑦（　　）日常社会生活記事

⑧（　　）映画シナリオ

⑨（　　）異文化交流・摩擦

⑩（　　）実務英語

8．　本学の英語授業で以下のことをやってみたいと思いますか。

①（　　）英会話をやってみたい
②（　　）リスニング
③（　　）英字新聞の読み方
④（　　）英文和訳
⑤（　　）英文レターの書き方
⑥（　　）和文英訳
⑦（　　）文法
⑧（　　）長文読解
⑨（　　）英語の歌
⑩（　　）洋画
⑪（　　）発音
⑫（　　）英語でのディスカッション
⑬（　　）ディベート
⑭（　　）スピーチ
⑮　その他（　　）

8-⑮には，⑭までに挙がっているもの以外で，やってみたいものを具体的に書いて下さい

9．あなたはこれから，短期留学，留学などについてどう思っていますか

①（　　）語学研修などの短期留学をしてみたいと思う
②（　　）留学したいと思う

質問9-①ないし9－②　に（a）あるいは（b）と回答した方は，さらに下の質問に答えて下さい。

③（　　）在学中に短期留学をしてみたい
④（　　）在学中に留学してみたい
⑤（　　）在学中に両方してみたい
⑥（　　）卒業後に短期留学をしてみたい
⑦（　　）卒業後に留学してみたい
⑧（　　）卒業後に両方してみたい

10．本学での英語授業にあなたが期待することを自由に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。

付録　2

アンケートの回答方法としては，個々の質問項目に対して，「非常にそう思う」場合は（a）を，「ややそう思う」場合は（b），「あまりそう思わない」場合は（c），「全くそう思わない」場合は（d）を記入するよう求めているが，質問により，その回答をどう解釈し判断するか，の基準を以下のように定めた。

質問2においては回答結果を①，②，③のいずれか1つとするため，以下の判定方法を取る。

判定1　aの回答をした項目をこの設問の回答とする。

判定2　複数の項目でaを選択している場合は，①>②>③の順に優先

判定3　回答にaがない場合は，b＞c＞d＞*の順に優先

・複数の回答で同値の場合は，①>②>③の順で優先

・ただし，すべてc，またはdの場合は②と判定

質問3においては，回答結果を①，②，③（「③＝どちらでもない」とする）のうち，いずれか1つとするため，下の判定方法を取る。

判定1　aの回答をした項目をこの設問の回答とする。

判定2　回答にaがない場合は，b＞c＞d＞*の順に優先

・複数の回答で同値の場合は，①>②>③の順で優先

・すべてcの場合は②と判定，　　・すべてdの場合は③と判定

質問4から質問9においては，それぞれの質問内容が，複数回答可とするような内容なので，被験者の意向を明確にするため，以下の判定方法をとる。

判定1　a，bの回答をした項目をこの設問の回答とする。

判定2　c，dの場合は無回答と判定

ただし，質問9においては，更に判定3，判定4を追加する。

判定3　質問9-③，質問9-④の両方にaまたはbを回答し，なおかつ質問9-⑤にもaまたはbの回答を行っている場合は，質問9-⑤のみを回答とする

判定4　質問9-⑥，質問9-⑦の両方にaまたはbを回答し，なおかつ質問9-⑧にもaまたはbの回答を行っている場合は，質問9-⑧のみを回答とする

付録　3 「本学英語教育に対する希望」自由記述欄より

IC：

英会話ができるようになるような授業をしてほしいなぁと思います
たのしい授業で１人１人のここがいいとかここが苦手とかを理解できる授業を求める
英語が話せるようになるコト！！
楽しくてわかりやすい授業
英語が上達してかつ楽しめる授業だと嬉しいです
なるべくわかりやすく
とにかくりゅうがくしたいデース
出来れば英語がしゃべれるようにしたいです
英語能力が上達していけるようにしたい
英会話が出来るようになりたい！！
英語が絶対しゃべれるようになる。
自分の英語技術が上達できればいいなと思っている
楽しくしかし確実に英語力が伸びるようにしたい。とりあえず本気でたのしくやりたい。
卒業後には英語作って［sic］仕事ができるようになりたい
卒業後海外で仕事したいです
楽しく英語を学びたいです

HS：

英語自体をきちんと理解したいと思います。
楽しく英語が身に付けばいいと思う
英語能力を確実にＵＰできる事。英会話ができるようになる事。外国で通ようする学習。
日常生活に役立つ事。
だめかもしれないケド英語が苦手な人の選技とか進むのおそくても分かるまでやるクラスとか。
きっと１からやれば嫌いな人はいなくなると思う。
わかりやすさ。
僕は英語は難しく苦手のイメージが強いのですが英語に対するイメージやあこがれはカッコいいと思うしちがう国の人とコミュニケーションが取れたら楽しいと思うのでがんばりたいです。
リスニング力を伸ばしてくれるような授業。
みんなで楽しくできる受業がいいです。嫌々やっていたら身につきません。
とりあえず人並に英語が出来るような授業をして欲しい
楽しく最終的には自分の努力
出来れば応用より基礎からやってほしい

わかりやすい授業
判りやすくて必要最低限，内容のある授業であれば良いです。
英文がしっかり理解できるようにする
わかりやすく力がつくようにしてほしい
今英語がぜんぜんできないので卒業するまでに少しでもいいから理解できるようになりたい
一人一人にあった授業をしてほしい
英語がもっと理解して話せるようになりたいです。
英会話など社会に出て役立つ実力をつけたい
中学まで決して英語は苦手ではなかったので文法や基礎をも１度習い直して英語の上達を目指したい。
自分ではうまく話せなくても何を英語ではなしているかを理解できるようになりたい。
今まで楽しい授業で英語がスキになれたので，楽しい授業がしたいです。
英語を話せるようになることと，楽しい授業
わかりやすく
きちんと話せる様になりたい！あと会話ができるくらいになりたいです。
英語がわかるようになりたいです
分かりやすい授業
いろんな単語を覚えていきたい！！
書く能力より，話す能力を身につけたい。

BA:
英語を学んで生きた英語を身につけたいです。留学してみたいと思ってます。
英語を上達したいのでがんばります
時間厳守。
英語の会話がもっと上手になりたい
無理矢理英語しゃべらせるのやめてほしい
英語で自由に話せるように外国に行っても生活できる
英作文力をつけること。
時間厳守　英語が上達した人はさらにその先に進めるようにしてほしい。
一つ一つしっかりと理解していきたい。
話したり，英語の映画を見て，苦にならず楽しめるようになりたい。勉強としての英語だけでなく日常的な英語も学びたい。
実践的な英語
リスニング力をアップし，日常会話ができ，本が読めるほどになりたい。
できるだけ吸収したいです　よろしくお願いします。
普段会話ができるスキルの英語を身につける授業をしたい。
なるべく質問は無しの方向で